

新編 西鄉隆盛

第四卷

林 房 雄



林 房 雄 著

新 編 西 郷 隆 盛

第 四 卷

不 知 火 の 卷
黒 潮 の 卷

創 元 社

新編 西郷隆盛 第四卷

昭和二十七年十二月二十日 初版印刷
昭和二十七年十二月二十五日 初版發行

檢印 廢止

著者

定價 二〇〇圓
地方定價 二〇五圓
小林房雄はやし ふさお

發行者

東京都中央區日本橋小舟町二ノ四
小林茂

印刷者

東京都港區芝田村町一二
創文社

發行所

株式會社 創元社
電話 茅場町(66)一七三四・二〇六四・四〇八三
振替 東京 一五六五・大阪 五七〇九九

萬一落丁亂丁本がありましたら取替へます

不知火の巻

黒潮の巻

第一章	北山時雨……………	二	第一章	夜見がへり……………	一三
第二章	秋霜……………	一〇	第二章	八手蜘蛛……………	一四
第三章	紅葉舟……………	一六	第三章	敗軍の兵……………	一五
第四章	櫨紅葉……………	一三	第四章	別れ路……………	一六
第五章	筑後川……………	一四	第五章	潮がかり……………	一六
第六章	歌問答……………	一五	第六章	榕樹の島……………	一七
第七章	磯の茶屋……………	一六	第七章	民謡……………	一八
第八章	南の霜……………	一七	第八章	新居……………	一九
第九章	海人小舟……………	一八	第九章	島の秋……………	二〇
第十章	お使者宿……………	一九	第十章	初矢の祝……………	二一
第十一章	藩命……………	二〇	第十一章	紅雪花……………	二二
第十二章	冬の満月……………	二一			
第十三章	薩摩潟……………	二二			

不知火の巻

第一章 北山時雨

木曾路は深い秋であつた。

老中間部詮勝はこの道を京都にのぼる。

信濃路では、朝な夕な強い霜が降りて、雪も間近と身にしみた。美濃に下つて、近江路に近づくにつれて、季節は初冬から晩秋に還り、磨かれた秋空の下に紅葉の色が照り輝いたが、それを樂しむ心の餘裕は今度の旅にはなかつた。

嘗ては梁川星巖に詩を學んだことのある間部詮勝である。自然と人の美しさの在り場所を知らぬ身ではない。嘗ては京都所司代をつとめて、御齡九歳の主上に咫尺し奉つた間部である。勤皇の心の何物たるかを心得ぬではない。

だが、井伊直弼に臆病者と罵られ、家康譜代の恩義はいづこに置き忘れたかと責められて、今は幕府を守護し京都を抑へるために西に行く我が身の上である。足利高氏か、非ず、願くば新田義貞にてあれかしと願ふ心を井伊掃部頭

は果して理解してくれるかどうか。

江戸よりの急飛脚は矢継ぎ早に間部の行列を襲ふ。強く出る、飽くまで強くつけしめる井伊の命令であつた。敵は天朝に非ず、水戸である。宗家の危難を他所に見て己が野心を逞しうせんとする水戸齊昭の悪謀である。この悪謀に破れんか、徳川三百年の功業は泥土に委して跡かたもなく消え失せる。臆病禁物、決斷肝要、不敏なりと雖も井伊直弼、江戸は我が一身に引き受ける故、京都は頼む、と美濃加納の宿で受取つた急飛脚便にはさう書いてあつた。

河渡の本陣に泊つて、十三夜の月に霞む櫻紅葉を圓窓の向ふに眺めながら、間部詮勝が書きしたためた返事は、

「私儀は、このたびは天下分け目の御奉公と存じ、一命を懸け候心得に御座候。」

強がりか、申譯か、そのいづれでもあり、そのいづれでもない。本管といへば本管……強ひられた本管なるが故に、なほ苦しかつた。近侍に命じて、書机の左右の短檠の蠟燭をつぎ足させつゝ、間部詮勝は再び我が心に繰返す。敵は天朝に非ず、水戸である、水戸老公齊昭は己の野心を

遂げんがため、徳川の天下を破滅の一手手前まで追ひつめた。京都の浪士、儒者、公卿どもの上を恐れぬ強硬な態度は、すべて齊昭悪謀の結果である。信濃馬籠の宿で受取つた京都所司代酒井忠義の密書によれば、京都に於ては、またしても、水戸齊昭の謹慎を解き、紀州慶福を西の丸より追ひ出し、一橋慶喜を將軍となし、越前松平慶永を大老に任ずべしといふ勅詔が降つたらしい。黒幕にかくれて、勅詔降下の糸を引いたのは水戸齊昭自身であると酒井忠義は言ふ。まさかそんなことは、と間部は思ふ。だが、さう思つては、自分の任務は果せない。どこまでも敵は水戸であると思つて始めて果斷の處置は生れるのだ。

「水戸老公などより如何なる難題申しかけ候とも、御聞き入これなく、將軍御守護第一になし下され候やう願ひ奉り候。天下には替難く候間、もしも水戸が勅命を楯に江戸城に乗りこむやうなことがあらば、殿中に於て容赦なく召捕るゝ場合によつては斬殺すも苦しからず。」

と書いて、また氣弱く紙を改めて、
「とまで存じ詰め候へども、これは宜しからず。」と書きなほした。

だが、そこまで書いてしまへば、騎虎の勢ひである。敵は水戸だと自分も思ひこみ、井伊にも思ひこませて、東西

歩調をそろへて驀進しなければならぬ。

水戸齊昭は將軍毒殺を企らんだといふ噂が江戸城中で行はれてゐる。奥醫者の櫻仙院といふものが、他の奥醫者に相談することなく差上げた薬を飲んで、間もなく將軍は薨去した。櫻仙院は水戸の廻し者であつたといふ嫌疑で逮捕されてゐる。間部は必しもこの噂を信じてゐるわけではない。いかに悪謀家の齊昭でも、それほどのはずまい。薨去の直前に薬を差上げたのが櫻仙院の不運である、と江戸にゐるときは考へてゐた。だが、今は無理にもそれを信じたい。櫻仙院を責めて責ぬいて、たとへ偽りの白狀であらうと、水戸との通謀のことが調書に現れば、京都に於て自分がどんな出方をしようとも、世の非難を避けることができるわけだ。

櫻仙院の吟味に至急取り懸つてもらひたい、と間部は書いた。

「この賊、白狀致し候はば、一番の手懸り、敵討の根本に御座候。この儀、相分り候はば、水老に切腹を仰せつけても然るべく候。さうなれば一橋慶喜を水戸に押込め、また紀州に押込めても然るべく候。」

京都のことは、私儀いろいろ相考へ、敵残らず取調べ、一人づつ問ひつめ、罪狀明白になつた分は、公然とその罪を唱へ、開門、押込、隠居等の取計ひ致すべく候。」

そこまで書いて、また自信がなくなり、

「尤も、このことは酒井忠義ともよく相談し、九條關白の御意向も充分承つた上で實行した方がよろしきかと存じ候。」

とつけ加へた。井伊の心が怖いのである。井伊は冷酷である。自分の政策を人に押しつけ、散々働かせておいて、もしもそれが失敗したなら、責任をその人に負はせて知らぬ顔をする。これが井伊のやり方だ。堀田正睦を退け、松平伊賀守を左遷した場合もそれであつた。仲間を見殺しにするくらゐなことは、彼には平氣なのである。その點をいろいろ考へながら、

「憚りながら、私儀、以ての外に丈夫に御座候。この模様にては、惡謀の者共、一呑みに仕る可しと勇氣充分に御座候。さりながら強氣を出し、荒々しくは仕らず候間、この儀も御心配下されまじく候。」

と硬軟兩様にとれる書き方をした。

「いづれ長野には、明日、醒ヶ井あたりにて申し談じ候やう相成るべくと存じをり候。」

長野主膳は既に京都を出發し、近江醒ヶ井の宿あたりで待つと飛脚便が來てゐる。

「私方にても、間者一人、京都へ差出し置き候間、この者ともよく相談するつもり、ついでながら御心得まで申上げ

置き候。」

自分とても、準備なく京都に入るのではないことを示しておきたかつた。

「江戸は、御貴殿と太田備後守にお委せ致し、京はこの愚老、いかやうとも必死に相成り相勤め候間、御安心下され度候。」

老婆心にて思ひ過ぎくなくだ申上げ恐れ入り候へども、御海怒下さるべく候。

赤牛大賢君 御返事

赤牛井伊掃部頭は、この手紙をどのやうな眼の色で讀むであらうか。お前もまた堀田や伊賀守の二の舞だぞ、と彼の冷酷な眼が笑つてゐるやうな氣がする。火焰の鞭をふるつて、自分を地獄に追ひこむ牛頭の怪物の姿が眼に浮んで、間部詮勝はひそかに身震ひした。

*

北山時雨が軒をたたく。

部屋の中は、眞晝ながら、夜のやうに暗い。京都水戸屋敷の御長屋。江戸の同志から届いた密書の中にして、西郷吉之助は主人の鶴飼吉左衛門と向ひ合つてゐた。

「期日は十月一日。」

「左様！」と吉左衛門はうなづく。

詮勝 百拜

「諸藩の同志は？」

「越前では橋本左内、長州では山縣半藏、土佐では橋詰明平……と書いてあるが。」

「水戸の名前がありませんな。」

吉左衛門は苦しげに、

「どうしたわけか、私にはよく解らぬが、おそらく井伊の手が藩公のまはりに延びて、水戸藩士と他藩との連絡を絶ち切つた、とでもいふやうな事態でも起つたのではなからうか。金子、高橋の兩士も、再び國許に追ひかへされるといふやうな、どうもそのやうに思はれる節がある。」

「長野主膳一派は、さきに水戸に下された勅諭は偽物であるといふ噂をしきりに流布してゐるやうですな。」

「左様、その噂は私も聞いてゐる。」

「世間はそろそろ、その噂を信じかけてをりますぞ。原因はどこにあるかと言へば、水戸藩自身にある。」吉之助はキラリと眼を光らせて、「いつまでも幕府に氣兼ねして、勅諭をお受けしたことを世間に發表せず、諸藩への回達も怠つてゐるから、長野主膳につけこまれて、偽勅の噂も立つやうになつた。近衛公もひどく御立腹の模様です。正眞の勅諭を偽勅扱ひにされたことは、水戸の優柔不斷のせものであると嘆きなされたとか。」

「申上げる言葉もない。水戸は水戸の責任をとらなければ

なりません。いや、責任は私自身にある。勅諭を奏請したのは、私であり、これを江戸まで奉持して行つたのは、私の倖幸吉だ。」

「いえ、その責任なら、私にもあります。水戸ばかりを責めるつもりはありません。……間部は既に美濃路から近江に差しかゝつた頃です。今は一刻の猶豫もできぬ。お互に最後の手段を盡してみようではありませんか。」

「何なりと、お言葉に従ひませう。」

吉左衛門は決心の面持。吉之助は膝を正して、

「では、僭越ながら、私の策を申し上げます。あなたは、今一度、近衛鷹司三條の御三卿を動かしていただきたい。私は京都大阪の間に兵力を集めることに全力を挙げます。江戸との連絡も私が引き受けませう。井伊大老斬除の日取は、江戸の同志の意見に従ひ、遅くとも十月一日と定め、東西同時蹶起を實行する。」

「東西蹶起、よろしい、それは承知。……しかし、西郷殿、そこまで決してゐて、今更なんのために御三卿を動かす必要がありますか。我々が動けばいゝものではござらぬか、我々が。……今更、兩様の構へは不必要！」

「いや、二つに見えて一つの構へです。我々自身に何時でも蹶起する覺悟と、その覺悟を實現する實力がなければ、いくら説いても、御三卿は動きませぬ。いくら間部を脅か

しても、間部はへこみませぬ。」

「では、聞きませう。あなたは御三卿に何を望まれるのか。」

時雨に繋る部屋の薄闇に、鶴飼吉左衛門の眼も螢火のやうに燃える。

吉之助は斷乎とした口調で、

「水戸、尾張、越前の謹慎を直ちに解除すべしといふ勅命を幕府に對してお下しになるやうお願いするのであります。」

「うむ。」

「して、これは、今までのやうな内勅ではいけません。どこまでも正式に、どこまでも公然と、内覽を通じ、傳奏の手を経て、幕府に下し賜はるのであります。」

鶴飼吉左衛門は思はず眼を見張る。これは幕府に對する公然の挑戦である。殆ど討幕の詔勅に等しい。論言一度發すれば汗の如し。再びかへすことはできないのである。幕府がもし反撥の氣勢を示したならば、直ちに兵を發して、これを膺懲しなければならぬ。その實力が既に朝廷にそなはつてゐると、この若者は確信してゐるのか。

「正式の御論旨を奏請するのだな。」

吉左衛門は念を押す。

「さうです。」と言。吉之助は眼ばたきもしない。

「もしも御三卿が躊躇なされた場合は。」

「一發して、斬りこむだけであります。」

「どこへ？」

「勿論、江戸に於ては、井伊、京都に於ては間部、酒井。」

吉左衛門は肩で大きな息をして、

「何も申すことはない。そなたが齊彬公の御遺志を實行するなら、私は義公の御遺訓、老公齊昭様の御志に従ふだけだ。よろしい、わが御老公の御眼中には、既に幕府はなからう。大義の實現のために、水戸の社稷を賭する御覺悟は夙に定められてゐるとお察し申上げる。あゝ、藤田東湖が生きてゐてくれたら……いやいや、東湖死すとも水戸の精神は亡びぬ。」

「清麿の心、正成の志とともに、東湖先生の魂は我々の胸に生きてをります。」

「よろしい。私の白髮首を、いや我が千幸吉の首もまた、この一舉のためにさゝげませう。……早速、御三卿におすがりする方法を講じてみます。返事は一兩日中に……」

「お願い致します。私はこれより、頼三樹三郎、春日潛庵先生を訪ね、諸藩有志の結束を固めてまゐります。」

「薩摩出兵のことは、お拔かりなからうな。」

「御念に及びませぬ。御老公のお許しなければ、脱藩突出

の手筈もとのつてをります。」

「……………」

「雨も晴れたやうです。では、行つてまゐります。」

時雨の晴れ間の、薄ら日のさす京都の町を、それから三時間あまり、西に行き東に飛んで、吉之助はあわただしく駆けまはつてゐたが、日暮に近い時刻、ぐつたりと疲れて柳の馬場の鍵屋に歸つて來た。

宿には誰もゐなかつた。伊地知正治も北條右門も、今朝、吉之助と一緒に出かけたまゝ、まだ歸つてゐなかつた。吉之助は押入れから蒲團をひきずり出し、一匹の大きな蟬のやうに轉がつて、そのまゝ寢こんでしまつた。障子にひびくほどの大いびきであつた。

何時間寢たか知らぬ。誰かに起されて、眼をさますと、暗くなつた枕元に、大きな坊主頭が坐つてゐた。

「誰だ！」

「僕です。」

「おつ、お前は俊齋！」

物に襲はれたやうに、吉之助は跳ね起きた。

*

「どうした、何が起つたのだ？」

「……………」

「和尚はどうした、和尚は？」

吉之助は叫ぶ。眼の色が變つてゐる。俊齋はニヤニヤ笑ひながら、

「和尚なら、どうもしないよ。」

「無事か！」

「無事です、ちゃんと大阪まで送りとどけて、吉井幸輔に預けてある。」

「預けた？ それですむのか。和尚をお護りすることを俺はお前に頼んだのだぞ。」

「怒るなよ、僕は和尚の用事で歸つて來たのだ。清水寺の執事に手紙をとどけ、その代りに和尚の冬の着替を受取つて來た。そらこの通り……………」

俊齋は傍の淺黄の風呂敷包をたたいてみせた。

「さうか、さうか。」吉之助はうなづき、始めて笑顔を見せて、「御苦勞だつたな。」

「うん、なに、なんでもない。……だが月照といふ和尚は、さすがに偉いな。伏見であんたと別れて、舟に乗込んだが、客が揃はなくてなかなか舟が出ない。堤の上には人通りが多く、その中にはたしかに捕吏らしい奴もゐる。あまり好い氣持はしなかつたさ。和尚がひどく落著いた顔をしてゐるので、少しおどかしてやれと思つて、この調子ぢやあ、いよいよ斬死かも知れませんぜ、その覺悟をして下さいと言つたら、なんの覺悟ですか、といふ呑ん氣な返事

だ。ふうん、やつぱり坊主は坊主だ、武士の覺悟は解らないのかな、と思つてゐると、和尚曰く死の覺悟といふものは窮地に臨んでつけるものではない。生死の覺悟は平生にある。私の覺悟は日頃から定まつてゐるから、今更なんの新しい覺悟も要りません。……一本やられたよ。」

「うむ。」

「少々口惜しかつたから、大阪では僕が上は手に出てやつた。舟が八軒屋に着いたのが夕暮で、どこかで飯を食はなければならぬ。和尚は町に知人がゐるから、そこへ行かうと言ふ。そりやいけません、僕についておいでなさい、と先に立つて、賑やかな飯屋へ入つた。和尚は不思議さうな顔をしてゐる。僕は手紙を書いて、重助に持たせて、吉井の長屋に行かせ、あとで和尚に言つてやつた。あんたは坊主だから、生死の覺悟はできてゐるかもしれぬが、兵法は御存知なからう。今朝も、竹田街道の茶屋で西郷は捕吏の真中にあなたの駕籠を置いて、却つて危地を脱した。僕があなたをこの賑やかな料理屋に案内したもの、それと同じ兵法です。用兵の法には正と奇があり、これは即ち奇兵に屬します、と言つたら、なるほど、なるほどと和尚、ひどく感心した。あつはつは。」

俊齋は嬉しさに獨りで笑ふ。吉之助も笑ひながら、「では、お前、これから大阪に歸るのだな。」

「いやです、僕は歸らぬ。」

「なに？……お前は和尚の用事で來たと云つたぢやないか。その着替はどうするのだ？」

「送ればいいさ。……俺はどうしても京都に残る。この重大な時期に國へ歸れるか。僕はあんたと一緒に働くのだ！一緒に死ぬのだ！」

坐りこんで動かぬ俊齋を、吉之助がもてあましてゐるところへ、伊地知正治が歸つて來た。不自由な足をひきずりながら、一つしかない眼を眞赤に充血させてゐる。俊齋の姿を見るなり、

「おい、お前か。ちやうどいゝ。いゝ時に歸つて來てくれた。人手不足で困つたぞ。」

俊齋は、それ見ろと言ひたげに吉之助の方に顔を突き出しながら、

「何か僕にも出来ることがあるかい、伊地知さん。」

「大ありだ。これからすぐに頼三樹三郎のところへ行つてもらひたい。彼は長野主膳を撃つといつて短銃を懷にして飛びまはつてゐるが、探しても無駄だ、長野は京都にゐない」と知らせせてやれ。間違つて他の奴を撃つたりしたら、大變だからな。」

「長野はどこにゐるのだ？」と吉之助が訊ねる。

「間部を迎へに近江か美濃あたりまで出かけたらしい、と

浮田一蕙が教へてくれた。……俊齋、和尚は無事に大阪まで行けたらう。」

「あゝ、無事だよ。」

「それも、長野が京都にゐなかつたおかげだと俺は思ふ。長野がゐたら、とても逃れつこはなかつたらう。月照引渡しを近衛公に要求したのは長野ださうだ、あいつは我々の同志の詳しい名簿を作つて、酒井若狭守の手元に提出したといふ。浪士や儒者だけではない。近衛三條兩卿や青蓮院宮の御名前まで名簿に載つてゐるさうだ。我々の名前も當然載つてゐると覺悟しなければならぬ。……酒井若狭守がその名簿を見て、あまりの数の多さに驚いて尻込みしたので、長野は怒つて、間部を説き伏せるために途中まで出迎へに行つたのだといふ。」

「生かしておけない奴だ！」俊齋は立上つて、「よし、僕が行つて来る！」

「おいおい、どこへ行く。長野は近江にゐるのだぞ、慌てちやあいかん。」正治は苦笑しながら、「お前に頼んだのは、頼三樹三郎の方だぞ。間部の着京までには、まだ四五日はある。その間に、實力を以て東都を固め、間部が暴壓の氣配を示したら、直ちに立上つて彦根城を衝く準備が整ひつゝあるから、くれぐれも輕舉をつゝしんでもらひたい、と頼に話すのだ。……だが、待てよ、この使者にもお

前は不適任かな、お前が頼と一緒にやつて騒いだのでは、火に油をそぐやうなものだ。」

「いや、この役目は俊齋に適任だ。」と吉之助は言つた。

「俊齋、行け。お前の力で頼三樹三郎を喰ひとめろ。」

「毒を制するに毒を以てすか。」

と伊地知は笑つたが、吉之助は眞顔で、

「なに、それほどの馬鹿でもなからう。俊齋、行つてくれ。」

「いや、僕は……」

「行つてくれ、頼む。」

「さうか。ぢやあ行くよ。」

不平さうに口をとがらせて、俊齋が出て行くと、それと殆ど入れちがひに、北條右門が歸つて來た。

「おゝ、西郷。また大阪駐兵のことが怪しくなつたぞ。

今、近衛家の原田才輔に會つたが、御老公はどうしても駐兵に賛成なされぬといふ。」

「原田が言つたか？」

「さうだ。」

「よし、俺は大阪に行かう。」

「今から？」

「行つて来る。」

吉之助は立上りながら、俊齋の残して行つた月照の着替

の包に氣がつき、

「あゝ、これも届けておかう。」

と抱上げた。

第二章 秋 霜

吉之助が大坂に向けて出發した九月十四日に、長野主膳は小川大介と變名して、近江醒ヶ井の宿に間部詮勝を出迎へ、夜の更くるまで密談した。

翌日も翌々日も間部の行列に加つて旅をつゞけ、十六日に大津の宿に着いたが、こゝには京都町奉行小笠原長門守が出迎へてゐた。長野が急飛脚便によつて呼寄せておいたのである。

「尾張、越前、薩摩、土佐の諸藩が京都に出兵するといふ流説があるさうだが、果して事實か。」

といふ間部の間に對して、

「そんなことは絶對にない。」と小笠原は打ち消した。「尾張と越前は京都附近には一兵も出してをりませぬ。土佐は住吉に若干の兵を出してをりますが、これは攝海防禦の幕命に従つたものです。大阪城代土屋采女の態度が怪しいと言はれてをりますが、これは家老大久保要なるものが浪人儒者及び水戸留守居役の鵜飼父子と親交があり、何やら策

動の模様があるところから立つた噂だと思ひます。土屋采女自身には、徳川家に弓く意志は毛頭ないと私は見込んでゐます。……薩摩の兵が二三百、近く海路大阪に到着することになつてをりますが、もし問題とするならば、この兵です。薩藩土西郷某、伊地知某、有村某と申すものが、先月來、柳馬場の旅宿に滞在し、しきりに策動してゐる事實があります。だが、薩摩の老公齊興は故齊彬とちがつて、至つて穩かな考への持主であるから、一家臣の出兵論に動かされるやうなことは萬々なからうと存じます。」

「では、諸藩出兵の流説は全然事實無根なのだな。」

「左様、私の見るところでは、一部爲にする者の立てた流説、さもなくば浪士どもの恫喝にすぎませぬ。」

「いや、必しも恫喝のみではありませんまい。」と長野主膳は言つた。「水戸、薩摩、越前、長州、この四藩の相富有力なる藩士が中心となつて、浪士糾合と京都出兵を目論見つつあるのは、どこまでも事實だと、私は見てをります。現在のところ、その計畫は殆ど具體化してをらず、一部悪謀者連の間の意見或は希望の程度に止つてゐますが、このまゝ放置しておいては、必ず事實となつて我々の足下で爆發するに相違ございませぬ。大英斷を以て、悪謀の根源を衝けば、事を未然に防ぐこともできませうが、一日躊躇すれば一日だけ、彼らの悪謀は具體化するのであります。着

京次第、こゝにあります名簿に従つて、一齊檢舉を開始していただきたい。私は一昨日來、繰返し、このことを申し上げてをります。私の意見は決して變らないのであります。」

「長野の意見では、薩摩にまで手をつけろといふのだが、小笠原殿、それはいかがなものかな。」と間部は言ふ。

「薩摩と長州だけはちよつと……」小笠原長門守は首をひねつて、「たしかな證據があれば別だが、この兩藩にいきなり手を著けたのでは、却つて蕨蛇かと私は思ひます。」

「左様、薩摩と長州だけは、後まはしの方がよろしいと思ふが。」と間部はうなづく。

「では、證據を御覽に入れませう。」長野主膳は冷たく笑つて、懷中から一通の手紙を取出した。「たゞ今、京都から到着したばかりの動かぬ證據です。」

「ほほう、これは。」間部は書狀を打ちかへして眺めながら、「鶴飼吉左衛門より安島帶刀へ……どちらも水戸家ではないか。」

「いえ、中を御覽になれば解ります。この手紙だけを讀んだのでは、薩摩の方がむしろ元兇と思ひたくなるほどの悪謀が書きこんであります。」

「むう、なるほど……頼三樹並びに薩の西郷と相談の結

果、小輪へ入説致し候ところ、いかにもむづかしく、しかし赤鬼の方へ一發致し斬込む者有之候へば直ちに林志を出すとのことは安きとの内話も御座候。御勘考下さるべく候。……だいふ陰語がまちつてゐるな。赤鬼といふのは御大老のことだらうが、小輪といふのは……」

「鷹司家の諸大夫小林良典のことです。西郷といふのは、水戸への内勅降下の面に暗躍した男であります。またしても勅諭奏請を惡謀してをります。林志は繪旨即ち勅諭です。今の時勢では繪旨を下すことはちよつとむづかしいが、誰か井伊大老を斬つてくれれば忽ち亂世となるであらうから、その時には繪旨を下すことも容易になるといふ意味であります。」

「もつてのほかの惡謀！」
「どうぞ、先をお読み下さい。」

「なにに……昨夜、西郷吉之助來り報告仕り候には、薩摩の人数大阪表へ明日明後日のうち、二百五十騎相備へ、大銃（五百匁大）四挺用意致し置き候。ふうん、……間部萬一暴政の模様相見え候はば伏見まで繰出し置き、直ちに蹶起の手筈整ひ申し候。……こりや全く、全くもつて怪しからん！」

間部詮勝の額には太い青筋が浮き上り、震へる手から手紙が落ちた。

「先は私がお読み致しませう。」長野主膳は手紙を拾つて、
「また土州も大阪まで人数を差出し候はずにつき、間部くらゐは一時に打拂ひ、直ちに彦根城に押しかけ、一戦に踏みつぶし申すべく、現在井伊の赤鬼は關東に手兵を集め、彦根城は空虚につき、一戦にて落城に及ぶべしとの見込みの由、なほ彦根城に押寄せ候へば、尾州よりも人数差出し申すべしとの物語に御座候。」

「いつたい、そのやうな密書がどうして……」

「いえ、出所は確かであります。水戸家飛脚問屋の京都店なる大黒屋庄之郎の密告により、使の飛脚を草津の宿にて取押へ、奪ひ取つたものであります。」

「むう、では、もう手遅れ。」

「なに、先刻も申上げたとおり、諸藩の出兵などいふことは、悪謀一味の夢にすぎません。ただし、このまゝ放任しておいては、夢が事實となる恐れがあります。機先を制して、一網打盡すれば、一味の悪謀は砂上の樓閣と消え失せます。」

「まだ間に合ふと申すのか。」

「勿論！ 必要なのはたゞ決斷力であります。」

「薩摩では西郷公之助なる男を捕へればいゝのだな。」

「左様。近衛公の委嘱によつて、清水寺の僧月照なる者を匿つたのも、この男であります。」

「よからう。西郷をも逮捕せよ。手配は……」
「京都のみならず、伏見並に大阪町奉行にも直ちに御發令下されば、萬が一にも取逃すことはなからうと存じます。」
長野主膳は兩手をつき、刺すやうな眼でちつと間部の眼を見つめた。

*
間部下總守一行は、九月十七日に入京し、妙滿寺に館を定めた。この日、所司代酒井若狹守の名によつて京都町奉行に發せられた祕密命令は、

「鶴飼吉左衛門の書面に依れば、この度、兵庫港より薩長土三藩の兵が參集の模様である。尤も、直ちに入京の様子は見えないが、場合によつては祕密に少しづつ上京といふやうな手段をとるかもしれない。」

伏見船着場は内藤豊後守に警戒申しつけたるにより、船着場並びに山崎街道を注意致し、いかがはしき者が上京してきたならば、密偵をつけて、行先その他篤と取調ぶべし。

もしまだ一時に多人數押登るやうなことがあつたら、直ちに警備の人数を繰出し、上京を差止むること。

しかしこの警戒が一般に知れては、人心不安のもととなるから、與力同心はよくよく人を選び、祕密警戒の旨を充分に申し含めて派遣致さるべし。」

京都の町の内外は俄に色めきわたつた。祕密警戒とはいへ、市中と諸街道の要所々々に眼立つて増えた捕吏の姿を見ては、人心は動搖せざるを得ない。明日にも事が起る、いや山崎街道の方では、もう始つてゐる、浪士と捕吏の斬合ひがあつて双方十名以上の死傷者を出した。伏見の方面では、薩藩士らしいのが三人斬り倒されたといふやうな尤もらしい流言が飛ぶ。

十八日の朝になると鍵屋のまはりを窺ふ密偵の數も急に増えて來たやうに思はれた。

「大丈夫かな。そろそろ宿を變へた方がよくはないかな。」伊地知正治は慎重な眼を光らせていふ。

「大丈夫だ。」と吉之助は答へた。「あと二日の我慢だ。遅くとも十九日には我が藩の交替兵が兵庫につく。これと大阪駐在の兵を合せば、我が藩の兵力だけでも、間部を叩きつぶすことが出来るのだ。」

「では、俺は兵庫に行つて來よう。」

「いや、君では眼立つ。兵庫には北條右門殿に行つてもらう。俊齋は頼三樹三郎と春日潛庵のところに行つて、長州との連絡を固めろ。それから、藩邸の若侍を一人、至急大阪に走らせて吉井に會ひ、土佐と土浦を動かす。この人選を、伊地知、君に頼む。」

「よし、それは引受けた。……で、君はどうする？」

「俺はこゝに坐つてゐる。一人だけは動かずに坐つてゐる奴がなければ手順がぐらつくからな。」

同志たちにそれぞれの任務を授けて、吉之助はひとり鍵屋の奥座敷に残り、江戸の堀次郎と日下部伊三次に宛てた手紙を書いた。當地の準備は充分に整つたから、關東もいつにても立上るべし、間部酒井の兵は柔弱なれば、彦根城攻略は容易なり、關東雷發の場合は至急御報知を乞ふといふ激しい内容の手紙であつた。

手紙は江戸に歸る同志杉浦彦之丞に托して、すぐに出發させた。

午を過ぎた頃、伊地知正治が藩邸から歸つて來た。大阪にゐるはずの吉井幸輔が一緒であつた。

「なんとも、をかしたことになるぞ。」と吉井は言つた。

「齊興御老公は手兵を全部率ゐて出發してしまつたぞ。大阪の藩邸には五十人の兵も残つてゐない。」

「なにッ、それは約束がちがふ。」

「俺もさう思ふが、御老公の命令だから、俺ひとりの力では、どうにもならなかつたのだ。」

手違ひは、それだけではなかつた。吉井の話では、兵庫に到着するはずの交替兵も何かの都合で延着の模様だといふ。